名所物見の旅 - 其の四拾七: 極北の夏

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

万年雪を頂く峻嶺、蒼く輝く氷河、太古より斧の音を知らない針葉樹の深い原生林、ツンドラと呼ばれる永久凍土で覆われた大地、アラスカはまさに最果ての地にふさわしい風景が広がっていた。

アメリカ合衆国の州として第４９番目に承認されたアラスカは、合衆国最大の州面積を誇り、北にはブルックスレンジ、南にはアラスカレンジという大山脈が聳えている。中心地帯の原野を東西に流れるユーコン川は、3.700キロに及ぶ長大なもので、上空から眺めたその流れは、くねくねと蛇のように曲がりくねり、地平線の彼方まで延々と続いていた。アラスカの大自然はあまりにも壮大で、すべてを圧倒するようなスケールで日本から来た私たちを出迎えてくれた。

極北の夏を楽しもうと訪れたアラスカで、初めて体験するのが白夜だった。白夜は私があらかじめ描いていた薄明のようなイメージと違い、夕方のような斜光線を受けた風景が2 ～3 時間も続くのだった。見晴らしのよい山に登って太陽の動きを追ってみると、太陽は地平線に沿って低い位置を保ったまま右へ移動していて、夜１２時を廻ってやっと地平線に沈んだ太陽は、ものの３０分もしないうちにまた顔を出した。そして驚いたことに太陽は沈んだ地点よりも左側、要するに東寄りに戻った地点から昇ってきた。地球の地軸の傾きに関連があるのか分からないが、なんとも不思議な現象であった。

我々は中心都市アンカレッジから北のデナリ国立公園や南のポーテージ氷河などでキャンプ生活をすることにして、キャンプ用品をアンカレッジのアウトドアーショップで揃え、アラスカ鉄道に乗り込んだ。

アラスカ四千メートル級ピークの氷河を登攀する。氷河を登るのは海外登山ならではの体験である。

デナリ国立公園はアラスカ山脈の主峰デナリ山の北麓に広がり、その面積は東京都の１１倍という広大な範囲の自然公園である。デナリ山とはアメリカ合衆国最高峰のマッキンリー山（6,194㍍）のことで、1980年からアラスカ州では現地名で表記している。デナリとは先住民デナッイア族の言葉で「偉大なもの」という意味をもつという。アラスカ地名局は山名も公園名もデナリと表記しているが、連邦地名局はいまだ山名をマッキンリーとしており、アラスカ州としてはデナリで統一したいようだ。私は三十年も前からデナリと呼んで先住民の名を大事にしているアラスカ州の姿勢を評価したい。地名は世界的に見ても植民地的な名前から歴史ある現地名に戻される傾向にあり、例えば最高峰エヴェレストはネパール族の「サガルマータ（大空の頭）」やチベット族の「チョモランマ（大地の母）」の名が定着してきている。

デナリ国立公園の原野で辺りを窺う北極地リス。愛嬌のある地リスはアラスカの人気者である。

午後１０時過ぎ、天候が回復して姿を現したデナリ山（マッキンリー山）。白夜ではこのように夜でも景色を眺めることが出来る。今から２５年前の冬、誰からも愛された冒険家・植村直己はこの山頂付近で消息を絶ったのだった。（ワンダーレイク・キャンプ場にて）

デナリパーク駅はアンカレッジから鉄路7時間３０分。駅周辺に数軒のホテルがある。デナリ国立公園内での滞在はテント持参でキャンプ場を利用するか、公園最奥にあるカンティシュナ地区の四軒のロッジに泊まることになる。ロッジは一泊400ドル以上と高額で、しかも予約を取るのが大変なようだ。キャンプ場はＲＶ車乗り入れ可能なところもあるが、私たちが泊まったのは水場とトイレ施設だけの素朴で静かな幕営地であった。いくつかのキャンプ場にはレンジャーが常駐しており、動植物のレクチャーをしてくれる。

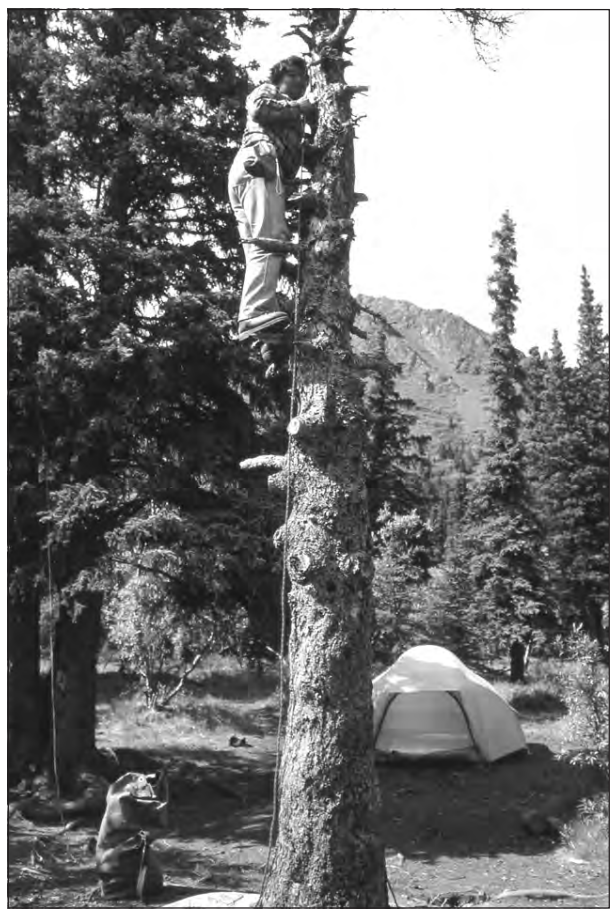
動物を探して付近の岩山に登ってみると、親子連れのドールシープが高山植物を食んでいた。（イグルークリーク付近にて）

我々は巨匠アンセル・アダムスの写真作品で知られるワンダーレイクに三泊、西部劇の舞台になりそうな岩山に囲まれたイグルークリークに六泊、そして公園入口の森の中のキャンプ場に二泊した。公園内のキャンプ場利用は年間１４日と制限されていて、それ以上の滞在を望む場合は許可書を貰ってバックカントリーと呼ばれる大自然の中でテント泊りするしかない。山慣れた人ならなんでもないことのように思うが、グリズリー（灰色熊）がうようよ歩いているような原野に出て行くのは勇気がいる。動植物の宝庫ともいえるこの周辺では、動物との遭遇は最大の楽しみであるが、唯一の歓迎されざる生き物が熊である。ガイドブックにはブラウンベアーは獰猛、グリズリーは凶暴と解説されていたが、この違いはどのくらいのものなのか、皆目見当もつかなかった。アラスカではテントの中で食事をするなと注意されていたので、現地で新品のテントを買ったのも、日本から食べ物の臭いが染みついたテントを持っていくのは危険だと考えたからであった。いずれにしろアラスカでは常に熊の影に脅え、注意していなければならないのだった。

幸いにもグリズリーとの出会いは滞在中一度だけ。しかもかなりの距離があったので、双眼鏡で見ても豆粒ほどにしか見えなかった。500ミリレンズで撮った親子連れらしいグリズリーの写真は、小さくて表情も分からないほどにしか写っていなかった。そのほかアラスカで出会った動物たちは、アメリカの国鳥・白頭鷲、ゴールデンイーグル、北極と南極を行き来する極アジサシ、狼、北極狐、北極地リス、ムース（ヘラ鹿）、カリブー（トナカイ）、ドールシープ（山岳羊）、ナキウサギ、北極ウサギなどなど挙げればきりがない。

もうひとつアラスカの原野で特筆すべきは大群のモスキートで、動きはさほど速くはないが、なにしろ数が多く見る見るうちに服が黒くなるほどで、その攻撃は半端ではない。防御には頭から被る防虫ネットとアメリカ製の蚊除けクリームが効果抜群だった。極地の蚊は昔の北海道開拓時代、真夏になると一斉に涌いて開拓民が悩まされたというヌカカに近いのかもしれない。北極地リスでさえも、顔に纏わりつく蚊を嫌がって穴に逃げ込むほどだった。夏のアラスカでは蚊対策だけは怠ってはならないという教訓を得た。

アラスカの夏は天気がよければＴシャツ一枚で歩けるが、曇ったとたんに急に寒くなり、ウールシャツやセーターは必需品である。八月も中旬を過ぎると秋の気配が漂い始め、アラスカの短い夏は終わる。秋や冬はどのような表情を見せてくれるのか興味深いが、デナリ山の4,600㍍地点でマイナス７３．３℃なんていう想像を絶する気温の記録があるくらいなので、平地でも相当な低温になるに違いない。私の周辺には、今度はオーロラを見に行こうという声も上がっているが、寒さに弱い軟弱な私は、当然のことながら二の足を踏んでいるのである。



グリズリー除けのためキャンプでは食料を木の高いところに吊り下げる必要がある。（イグルークリーク・キャンプ場にて）